

2016 年度：山梨大学教育学部学校教育課程所属学生の進路希望の推移

Changes in Career Planning of Students of School Education
in the Faculty of Education at the University of Yamanashi in 2016

平井政幸* 澤登義洋* 角田修*
HIRAI Masayuki SAWANOBORI Yoshihiro TSUNODA Osamu
松森靖夫**
MATSUMORI Yasuo

要約：山梨大学教育学部の教職支援室では開設当初の 2012 年度より、個人面談等を手法として、学生を対象にした進路希望調査を実施している。本稿では、2016 年度に実施した進路希望調査や口頭面接によって明らかになった、山梨大学教育学部（旧教育人間科学部）の学校教育課程に在籍する各年次約 130 名の進路希望の推移について結果を示すとともに、分析を加えた。得られた主な知見は、以下の①～⑤の通りである。①年次進行に伴い、教職希望の学生の割合（％）は減少し、教職外希望者が増加する傾向があること、②過去 4 年間の 1 年次学生のうち、2016 年度の 1 年次学生の教職希望の割合（％）は最低であったこと、③入学当初からの教育現場での体験が少ないために、強い教職希望を抱くに至っていない学生が相当数存在すること、④左記③とも連動することであるが、入学後に教職希望から教職外希望に変化する学生も散見されること、⑤入学試験方法を再考して、入学当初より強い教員志望を抱いている学生を確保すること。

キーワード：教員養成・教職支援室・学生の就職希望調査

I はじめに

周知の通り、2016 年 8 月 30 日、文部科学省より 2017 年度予算概算要求が発表された（文部科学省、2016）。その中には、授業改善や発達障害などへの支援の充実として、小中学校教職員定数を 10 年間で約 3 万人増やす計画が盛り込まれている。また同時に、貧困家庭に育つ児童・生徒の学力底上げのための教職員、いじめや不登校の対応強化のための教職員、及び小学校での理科・音楽・英語などの専科教職員の増員・充実も要求している。このように、国家的規模で教職員の質的かつ量的な充実が叫ばれている今日、従前にも増して、教員養成系学部における教職員の計画養成は急務の課題となっている。しかしながら、教員養成系学部に在籍する学生の中には、教職に就く意志が極めて希薄な者が相当数存在する。例えば、2012 年に山梨大学教育学部（旧教育人間科学部）学校教育課程に入学した学生の場合、教職以外の職種等を希望している学生は、1 年次：11.3%，2 年次：22.1%，3 年次：30.0%，4 年次：39.5% 存在し、学年が進むごとに約 10 ポイント程度増加している（平井ほか、2015）。同様な傾向は他の教員養成系学部においても報告されている（長谷川ほか、2004）。

ところで、山梨大学教育学部（旧教育人間科学部）においては、2012 年度より教職支援室が中心

* 教育学部教職支援室 ** 科学文化教育講座・附属教育実践総合センター長

となって入学した学生に対する進路希望に関する質問紙調査や口頭面接を継続的に実施している。また、既にその調査結果の一端を本誌に報告してきた（平井ほか，2015）。引き続き，本稿では，2016 年度の各年次に在籍する学生の進路希望の実態について示すとともに分析を加える。

II 進路希望調査の結果とその分析

1. 4年次生の進路希望の推移について

表1からは，1年次（2013年度）から4年次（2016年）に移行するにつれて，教職希望者が徐々に減少するとともに（1年次：93.1%→4年次：62.4%），教職外希望者が増加している（1年次：3.1%→4年次：33.6%）ことが読み取れる。また，職種の細目では，年次を追うにつれて，中学校教員・高等学校教員の希望者が減少して，公務員・企業・進学を希望する学生が増加していることが分かる（図1）。全体としては，年次進行と並行して，希望職種が多様化する傾向がある。

表1 4年次生の教職希望者・教職外希望者の経年変化

	教職希望者						教職外希望者				計
	幼(保)	小学校	中学校	高等学校	特支学校	校種未定	公務員	企業等	進学	未定	
4年次			78				42		5		125
			62.4%				33.6%		4.0%		
3年次			91				30		3		124
			73.4%				24.2%		2.4%		
2年次			118				7		3		128
			92.2%				5.5%		2.3%		
1年次			121				4		5		130
			93.1%				3.1%		3.8%		

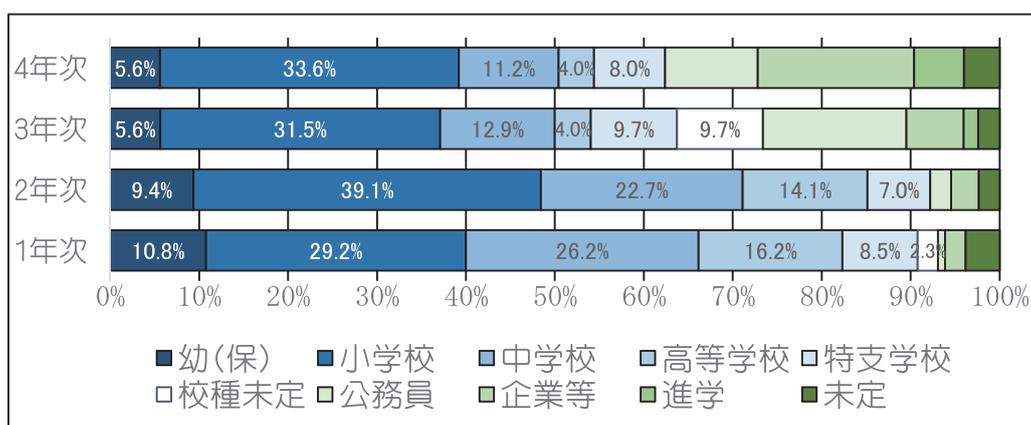


図1 4年次生の各職種等への希望者の経年変

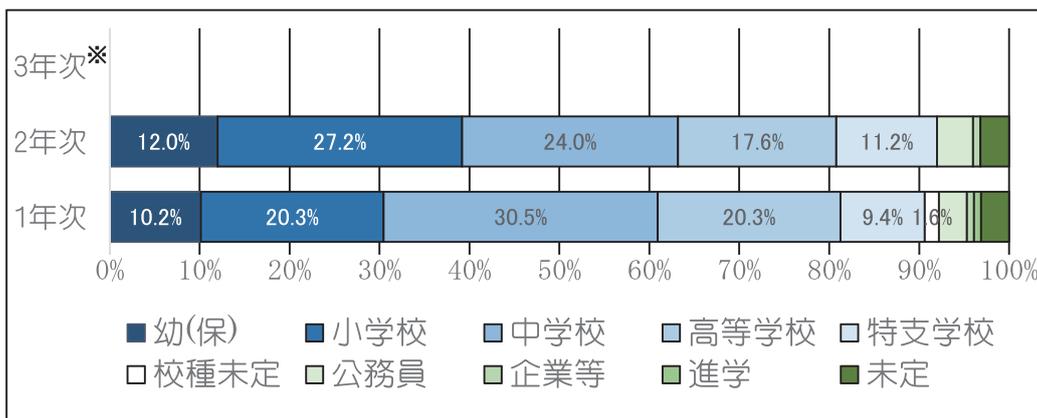
2. 3年次生の進路希望の推移について

学内行事等の関連で，3年次生対象の質問紙調査や口頭面接は現在実施している最中である。したがって，表2及び図2には，2015年度までの経年変化を示した。なお，データが確定次第，続報として報告する予定である。

表2 3年次生の教職希望者・教職外希望者の経年変化

	教職希望者						教職外希望者				計
	幼(保)	小学校	中学校	高等学校	特支学校	校種未定	公務員	企業等	進学	未定	
3年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2年次			115					6		4	125
			92.0%					4.8%		3.2%	
1年次			118					6		4	128
			92.2%					4.7%		3.1%	

注：表中の（－）印は、現在データ収集中であることを示す。



※尚、3年次については、現在データ収集中である。

図2 3年次生の各職種等への希望者の経年変化

3. 2年次生の進路希望の推移について

現在4年次に在籍する学生の1・2年次当時の教職希望者は、90%以上存在し（表1）、3年次現在3年次に在籍する学生の1・2年次当時の教職希望者も、同様に90%を上回っていた（表2）。しかしながら、現在の2年次生の教職志望者は、1年次当初より依然として90%を割り込んでいる。教職離れの兆候が懸念されるところであり、現在の4年次生（図1）と同様に教職以外への職種の希望が増加傾向にある（図3）。

表3 2年次生の教職希望者・教職外希望者の経年変化

	教職希望者						教職外希望者				計
	幼(保)	小学校	中学校	高等学校	特支学校	校種未定	公務員	企業等	進学	未定	
2年次			112					15		3	130
			86.2%					11.5%		2.3%	
1年次			116					9		7	132
			87.9%					6.8%		5.3%	

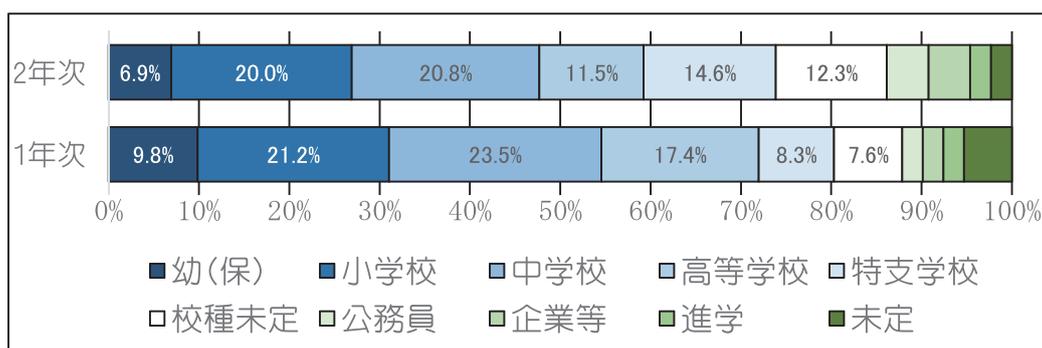


図3 2年次生の各職種等への希望者の経年変化

4. 1 年次生の進路希望の推移について

1 年次の学生に関するデータを、表 4 に示す。特筆すべき点は、現在までの 4 年間の 1 年次生の中でも教職希望者の割合が最低であり、約 85%にとどまっているということである。連動して、教職外希望者も約 10%に昇り、調査開始以来の最高値を示した。なお、各職種別の希望者の状況等は、既述した 2～4 年次の学生（図 1～図 3）と類似しており多様であった。

表 4 1 年次生の教職希望者・教職外希望者

	教職希望者						教職外希望者				計	
	幼(保)	小学校	中学校	高等学校	特支学校	校種未定	公務員	企業等	進学	未定		
1年次	112						13				7	132
	84.8%						9.8%				5.3%	

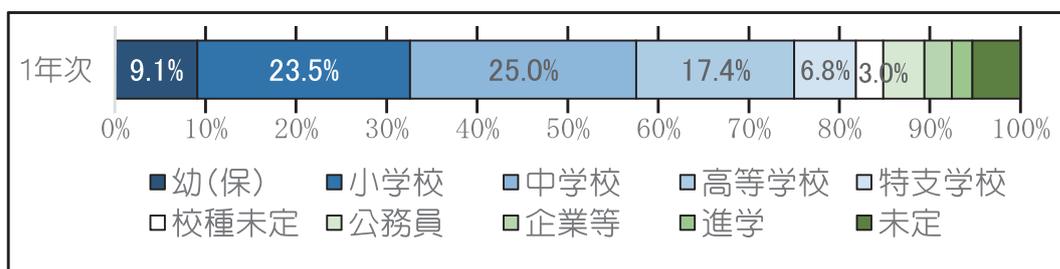


図 4 2 年次生の各職種等への希望者

Ⅲ 口頭面接にみる学生の就職希望について

1. 口頭面接の基本的理念

例年と同様、2016 年度の就職に関わる各学生の口頭面接における基本理念は、各学生が自らの適性に気づきながら、各自の適性に合致した職種を自らが主体的に選択するのを支援することにある。周知の通り、職業選択の自由は法的に保障されているものであり、教職外希望から教職希望への変更を強いるのは極力避け、教職外希望の学生にも有用な支援となるような口頭面接である。さらに換言すれば、従来までの問題解決的アプローチ（学生が抱える就職に対する諸問題や原因を追求するアプローチ）ではなく、解決構築的アプローチ（学生の資質や可能性を引き出し、望む職種に向かって自己変容を積み上げていくというシンプルなアプローチ）でもある（ピーター・ティヤングほか、2004）。

2. 口頭面接のプロトコル分析

本節では、計 3 人の学生（A・B・C）の面接プロトコルを順次列記しながら、分析を加える。3 人は現在 2 年次に在籍しており、既に 1 年次にも就職に関する口頭面接を受けている。

(1) 学生 A の場合

学生 A の口頭面接プロトコルを図 5 に示す。発言 S 4 に表れているように、企業への就職から教職希望に傾向しつつある学生である。また、発言 T 5 では、学生 A に教師としての適性を有することを気づかせる一方、職種は最終的に学生自身で決めるように促している。さらに、S 7 の発言から、企業の営業職に就く上で、要求される適性（人と話すことに苦手意識がないこと）が備わっていることを意識化するに至っている。

図 5 のような解決構築的アプローチによる口頭面接を通して、学生 A は、人を相手にする職種（発言 S 8）として教職と企業（営業）が同一線上にあり、かつ就職したい具体的な企業種も定まって

はいないことが明らかになった。3年次以降に本格的に開始される教育実習の体験などを通して、教職に就こうとする意志をさらに強く持つことが期待される。

- T 1 : 現在の希望は中学校？
S 1 : 今の希望は教員というのが半々くらいで、やるとしたら中学校です。
T 2 : あとの半分は？
S 2 : あとの半分は企業へ就職も考えています。
T 3 : 去年も未定だったが、まだ決まらない？
S 3 : 去年よりも教員になろうかという気持ちは大きくなっている。
T 4 : 教員希望が大きくなったのはどんな理由で？
S 4 : 去年は漠然とした中で教員はなしとしていたが、今年に入り、父親が僕の昔お世話になった先生に会うことがあって、その先生が父親に僕のことを教員になるように言ってくださいと話してくれて、それが大きいです。
T 5 : 周りの人の勧めを聞くことは大事だ。特に、先生は〇〇君のいろんな性格を分かっている教員に向いていると思うところがある、お父さんに話をしたのだろう。最終的に進路は自分で考えて決めることだけど、家の人とか周りの人やお世話になった先生など色々経験した人たちの話を聞いて参考にすることが大切です。
T 6 : 去年よりは先生になろうという気持ちは大きくなっているということですが、なるとすれば山梨県を考えているのか。
S 5 : 考えているけど、山梨だと枠が狭い。僕らの卒業するころは枠が大きくなっていくという話を聞くけど、山梨でどうしてもなりたいという気持ちはそんなに大きくない。なるとしたら東京などの方が採用の枠が大きいのでそちらでもいいかなという風に考えています。
T 7 : 県外に出ることについて家族は何か言っていますか。
S 6 : 大丈夫です。どこでも自分の決めた所に賛成してくれます。
T 8 : 東京も採用数の増加の頂点は越したと言われている。子どもの数が減っていて、採用の数が今後増えていくことはおそくないが、山梨に比べれば当然採用枠は大きい。
T 9 : 企業だとしたらどんな関係の企業を考えているのか。
S 7 : 企業についてあまりこだわりはないが、人と話すことに苦手意識はないので、むしろそこが自信もってやれると思うので営業のようなことをやっていけたらと思っています。
T 10 : 人を相手にするということでは先生もそうだ。
S 8 : それで先生もと考えています。
T 11 : 将来の就職に関わって心配になることや悩んでいることは？
S 9 : 企業に就職するとしたら、今、教育学部に来ているので就職の時になんで教育学部に行ったのに就職にしたのという感じになると思う。教育系のことを学んでいるが、今学んでいることを就職した時に生かせるかということになると不利になってしまうのではないかと考えています。
T 12 : 必ずしも不利になるとは限らないのではないかと。今まで勉強したことを基にして、企業は採用したから即第一線で一人前に活躍することを期待するのではなく、そこから研修をして企業の求めるような人材になってもらい、その企業のために仕事をしてもらうということが多いのではないかと。
S 10 : 企業に就職するとしても、こんな所というのが定まらない。今は教員になるための勉強をしているので、この先就職するとしたらこんな所がいいなというのが定まってくる気があまりしない。そうなると思うと難しいと思っています。

注：図中のTは面接者（教員）、Sは被面接者（学生）をそれぞれ表している。

図5 学生A（社会科教育所属）の口頭面接プロトコル

(2) 学生Bの場合

学生Bは、1年次の口頭面接において進路未定であったが、図6の通り、2年次に至り中学校理科教諭の職に就くことを考えている。しかしながら、2年次に必修である介護等体験実習の体験（発言S1～S10）からも容易に読み取れるように、教職に対する自信の喪失や、教員としての自らの適性に対して過度の不安を覚えていた。

面接者からの介護等体験実習の目的に対する発言（T8）や、教職に就くまでの地道な取り組み等な自信につながるという内容の発言（T13）を行って、面接が終了する形となった。学生Bは、大変まじめな性格であるためか、自己の適性の評価に厳しく、十分納得できている状況にはないが、教育実習等を通して将来の教員ならではの自己効力感を味わってほしいと切に期待している。

- T1：卒業の進路を聞いていますが、今現在1年間大学で生活してみてどのように考えていますか。
- S1：中学校を主に考えて副免で家庭をとってやろうかなと考えていたけど、変わらないと思うけど、先日、特別支援学校へ実習に行って自信をなくしている。
- T2：特別支援学校へ実習に行って自信をなくしてしまったとは…どうして？
- S2：体力がないなど思ったことと、子どもに対してどう接してよいか分からなくて困った。
- T3：特別支援学校での介護等体験実習を通して持った感想ということ？
- S3：正直、怖いなど思った。時間が解決するのかなというのがあるが…。
- T4：2日間行ってどんなところが大変だった？
- S4：先生にどうしてもなり切れなくて、私は実習生であっていくら先生と呼ばれても先生という自覚が持てないことが大きかった。
- S5：私は小学部の中学年を担当したけど、子どもの扱い方とか大変だった。
- T5：子どもたちとどう接したらよいかとかどう指導したらよいか難しかったということ？
- S6：弟がいるので、弟と接するように一緒に遊んだりすることはできるが、先生というのはちょっと違うので、かまいすぎてもいけないしそのバランスが私には難しかった。
- S7：子どもたちも先生というよりは実習に来てくれたお姉さんというイメージが強かったのか、他の実習生と比べて私は先生としてできたことはかなり少なかったのかなという感じがします。
- T6：ほかの実習生とは、一緒に行った人たちのこと？
- S8：そうです。
- T7：それはないと思うけど…自分が比べてしまうのでそう思うことがあるかもしれないけれど、そう思うほどの違いはないと思う。他の人のほうが良く見えてしまうことがある。大きな違いが出ているとはないのでは…？
- S9：そのことが自分ではすぐもやもやしてしまっ…。
- T8：2日間の介護等体験実習は、…〈中略〉…子どもたちの前に立って目標に向けて実際に指導していくというものではない。今回は、体験することが目的になっている…〈後略〉…。
- S10：そういう不安とかごちゃごちゃしたものが自分の中に出てしまった。
- T11：いろいろなことを感じてもらうことが大切だ。不安や心配事が出るということは真剣に取り組んだということだと思う。
- S11：そういう諸々のことも含めて中学校で考えてみます。
- T12：将来的に考えて不安なことは？
- S12：私の教員の適性ですかね。教育実習が怖いです。
- T13：一つ一つのことをしっかりやって、その積み重ねがだんだん自信になる。

図6 学生B（科学教育所属）の口頭面接プロトコル

(3) 学生Cの場合

1 年次当時は幼稚園教諭を希望していたが、図 7 に記載されているように、2 年次では幼児教育に関わる企業への希望に変えている（発言 S 1）。その背景には、学生 C 自身による適性の捉えや、保護者からの職業選択に対するアドバイスが存在していた（発言 S 6）。ところが、口頭面接の後半になると、幼児教育に関わる企業に加えて、心理関係の職種にも強い興味を示していることが分かる。

学生 C の職業選択に対する悩みは、学校教育課程所属の他の学生にも散見される。このような職種選択の悩みを速やかに解消してやるための一助として、発言 S 10 にあるように、入学時の早期から実際の教育現場に触れる体験を増やすことが挙げられる。実際の教育現場に精通していない学生が、強い教職志望を抱くこと自体、大変難しいようにも考えられるからである。

- T 1 : 去年は幼稚園の先生を希望していたけど、1 年たってみてどうですか。
- S 1 : 今は、実習にも行ってないからはっきり決めてないけど、どちらかという幼児教育に関わる企業に行きたいと考えている。
- T 2 : 企業の方が強いかなと考えているようだけど、幼稚園希望から企業に替わった理由は何かあるのか。
- S 2 : 特にないが、幼児教育の方もそんなに習ってないし、実習に行ってみないと分からないが、給料面とかいろいろなことを親から聞いて今迷っている。
- T 3 : 幼児に関わる仕事？
- S 3 : 幼児教育に関わる仕事がいいなと思っています。
- T 4 : もっとも決め手になったのは給料のことか。
- S 3 : それもあるけど・・・
- S 4 : はっきり決めていないからだけど、そっちの道もあるかなと思っている。
- T 5 : 幼稚園のことも考えている？
- S 5 : 幼稚園のことも考えています。
- …＜中略＞…
- S 6 : 家の人と話して、私は物を作ったり考えたりすることが好きで、それを親に話したらそれだったら幼児系の教育のための玩具を開発する企業でもおもしろのではと言われ、そういうものもあるなと思ってまだ迷っています。
- T 6 : まだまだ何とも言えないということですか。
- S 7 : いま、心理を習っていて、教育の授業より心理の授業の方が楽しいなと思っています、幼児の心理とかを専門にしようとする教育系とは少し違ってくるのかなとも思っている。
- T 7 : 心理の勉強は楽しい？
- S 8 : 心理の方がおもしろくて興味があります。
- T 8 : それが生かせる仕事を考えているのですか。
- S 9 : 生かせるというかそっち方面だとすると、教育はちょっと違うかなと思う。
- T 9 : 子どもたちの教育もそれが専門ではないが、仕事上は当然必要になってくる。
- T 10 : 就職についての悩みは、決めかねているところかな？
- S 10 : 幼稚園の先生も元々自分の希望だったし、実習にも行ってないので実際に自分で体験していないのでやってみなければ分からない面もあるので決めかねている。
- …＜後略＞…

図 7 学生 C（幼小発達教育所属）の口頭面接プロトコル

IV 結語にかえて

本稿では、2016 年度の学校教育課程に在籍する学生の進路希望の推移を概観してきた。その中では、年次を追うごとに教職志望者が減少傾向にあること、及び職種選択に戸惑っている学生の実態を浮き彫りにできたと考える。このような問題の背景には複合的な原因が存在するが、その一つに入学試験の方法が挙げられる。具体的には、入学当初から既に教職を強く希望している学生を選抜できるような入学試験の方法の再考であり、学部全体の課題として早急に検討していく必要がある。

【引用・参考文献】

- 長谷川順一・浅野文恵（2004）：「学校教育教員養成課程 3 年次生の進路希望と教育実習イメージ」、『香川大学教育実践総合研究』, No. 8, pp. 147-156.
- 平井政幸・小池正・山村新一・樋口裕子・松森靖夫（2016）：「山梨大学教育人間科学部学校教育課程所属学生の進路希望の推移」山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター『教育実践学研究（センター研究紀要）』, No.21, pp. 117-122.
- 文部科学省（2016）：「平成 29 年度文部科学関係概算要求のポイント」Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/yosan/h29/1376627.htm
- ピーター・ティヤング／インスー・キム・バーグ（玉真慎子・住谷祐子・桐田弘江訳）（2004）：『解決のための面接技法－ソリューション・フォーカスト・アプローチの手引き－（第 2 版）』, 金剛出版, pp. 25-31.